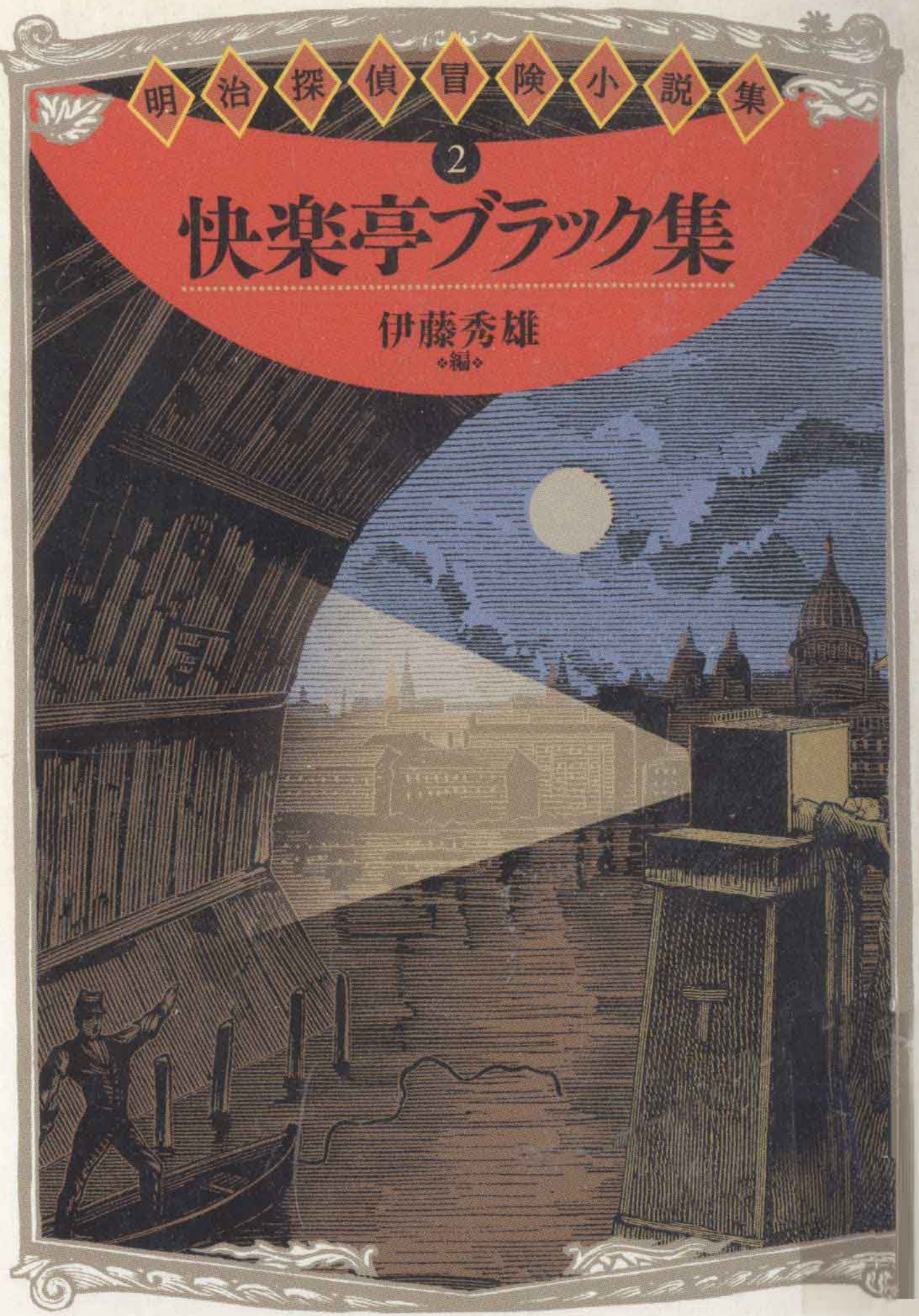
明治探偵冒険小説集

2

快楽亭ブラック集

伊藤秀雄
編



ちくま文庫

東海道中膝栗毛(下) 〔全2冊〕

1973年11月16日 第1刷発行©
1987年6月22日 第12刷発行

定価500円

校注者 麻生磯次

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・法令印刷 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan
ISBN 4-00-302272-6

ちくま文庫

快楽亭ブラック集

明治探偵冒険小説集2

伊藤秀雄 編

筑摩書房

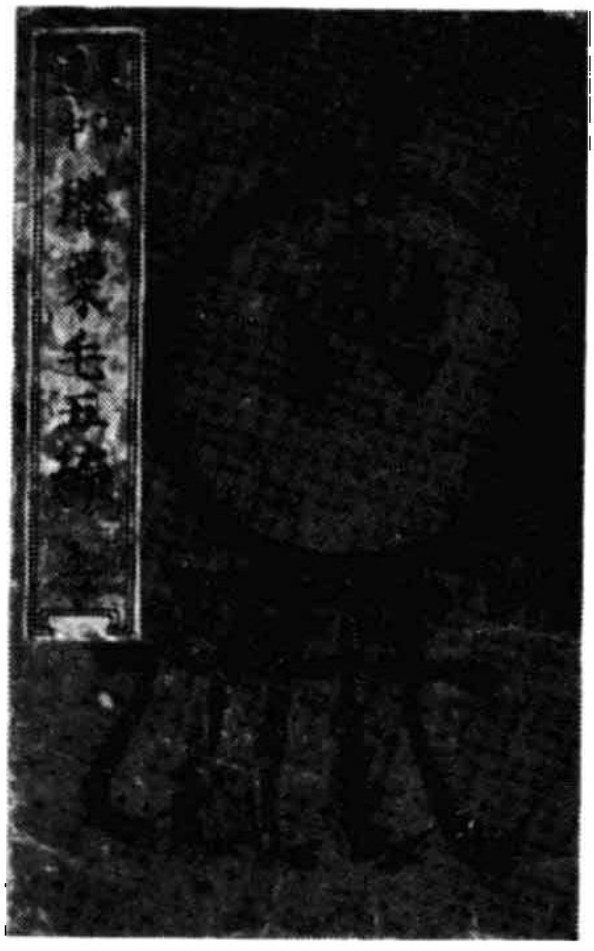
目　次

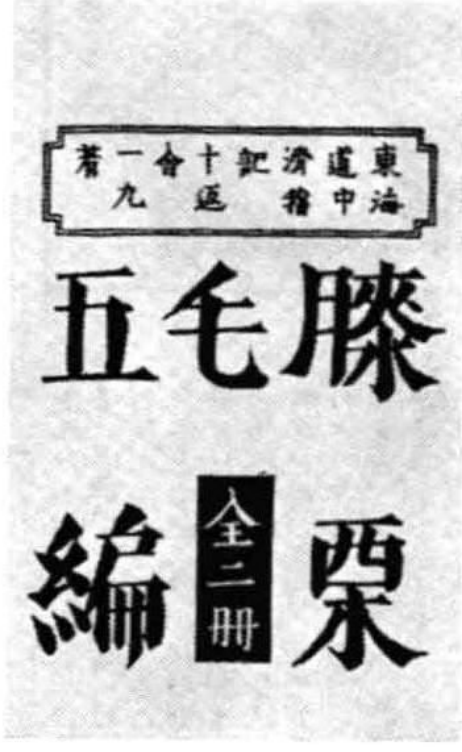
五　編　上　桑名から追分まで……七
　　下　追分から山田まで……四三
五編　追加　伊勢參宮……八五
六　編　上　伊勢から伏見を経て京に入る……一三五
　　下　京見物……一七三
七　編　上　京見物……二〇九
　　下　京見物……二四三
八　編　上　大坂見物……二八三
　　中　大坂見物……三一六
　　下　大坂見物　住吉詣　大坂出立……三四一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

補注……三八五
付図

東海道中膝栗毛　下





〔見返し〕

膝栗毛五編序

(一)歌人は居ながら名所をしり、雅人は行て名所を探る。今年五篇目の膝栗毛を十編舎の主人、心の手綱をかいくり〳〵くりかけ見れば、伊勢の海(二)千尋の濱に深くうがちて、洒落を花なる貝盡し、古跡(四)を溫て新しき、趣向を見する筆のすさみに、予も寐ながら名所(五)をしり馬、はねる顔にて序すること、是作者の需に應じてとはうその皮、もとめもせぬに筆を採しは、跡(六)の一杯がすぎ田のむめの、香にひかれたるうかれ心、これも亦余(七)慶の仕事と謂ん歟

文化丙寅春

龜山(九)人蘭衣誌

一　歌人は古歌や歌枕をしらべて、実地にその場に行かなくても、天下の名所の様子を知る。
二　五編目、十編舎と数を並べた。三　伊勢国と志摩国の境目辺の海をいう(二見から鳥羽に至る途中の海)。
四　「溫(ふるき)を尋(たづね)て」とある本もあるが、今はこれに従う。故きを溫ねて新しきを知る。論語、為政篇に「子曰ク、故キヲ溫ネテ新シキヲ知ル、以テ師ト為スベシ」とある。
五　「名所を知る」に「尻馬」をかけた。「馬」から「はねる」と続けた。「尻馬」は人の後について事をすること。六　あとで飲んだ一杯の酒が過ぎたに「杉田」をかけた。「杉田」は横浜市磯子区の町名。梅の名所として知られる。七　膝栗毛の余沢という意と、余計(むだ、無用)な仕事とをかけた。八　文化三年。九　二代喜三二。苟楽亭長根。

附言併凡例

予今年神無月廿日あまり、六日の朝おもひたちて、東海道に杖をはせ、伊勢路に赴き、内外の宮巡りして歸りしは、雪見月の五日になん。そよりして此五編目の著述にかゝり、彫工机のもとにたえず、須臾も筆をおくことなし。然るにいづれ人の編りけん、膝栗毛續編といへるもの、皇都の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより、予が方におこせたり。予是を閲するに其排設つゞまやかにして、滑稽もとも工みなり。おしむらくは、かゝる筆の文をもて、などて自立せざるこそ不審けれ。そは名を素る人に非ず、欲にはするの徒なるべき歟。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。此故に今五篇目にいたるまで、頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、益膝栗毛の

一　陰暦十月。
二　陰暦十一月。
三　彫師がたえず自分の机のそばにいて、次の原稿をまちかまえている。
四　外題作者西工書肆名目錄に「新右衛門町　優賀堂　上総屋儀兵衛(朱)忠助」とある。
五　排置。排列。文の構成。
六　簡素で、むだがない。ひきしまっている。
七　もっとも(最も)に同じ。
八　こういう文才をもちながら、一本立にならないのが不思議だ。
九　自分の名を堂々と出してひろめようとする人ではなく、ただ本を売って金をもうけようとする人であろう。
一〇　広告の札。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

尾に尾をひかんことを、おしはかれるにやおぼつかなし

或人曰。此書初編より四篇に及ぶ迄、弥次郎兵衛北八なるものゝ、髪結月代(一)をせし所を見ず、こは大江都を立出しより以來、其事なきはいかにぞや。予答曰。(二)こたび旅行の刻しば〳〵その光景を見るに、風土人情の差別、方言のおかしみ、其洩たること、欠たること、算ふるに十指を出たり。さればその足ざるを穿難じ給はるこそ、予が爲の幸なれば、取あへず其ことをもて追加に出せり。

羈中飯盛おじやれの戯れは、卷中毎に粗あらはして事ふりたれど、こたび作者の旅宿にて、実に夜這といへることを、仕損じたることのあなれば、其事をもて、弥次郎兵衛北八が、四日市泊の趣向とす(三)

東海道追分(四)までを上卷とし、其余伊世路にかゝりて、事繁く記すに遑あらず。漸山田に此卷の筆をとゞめて、續編に妙見町の奇宿古市の遊樂、相の山の宮めぐり等をあらはし續て出板す

一　足利時代の末期から、男子の頭髪を額髪から頂の中央に剃るのを月代といった。ここは月代を剃ることをいう。

二　今度の旅行に際して。

三　陳腐になってしまったが。

四　東海道名所図会、二「追分参宮道此所関東より太神宮参宮道の別れなり。これより神戸(かんべ)・白子(しろこ)・上野・津へ出るなり。山田まで十六里」

(三)兼々聞及貴公才
一遍相逢親十回
探得神都神代穴
翩々乗膝栗毛來
右初逢十返舍一九生自勢刄遣戯賦以送

瀬芳園艸

三　兼々聞き及ぶ貴公の才、一遍相逢い親しむこと十回、探り得たり神都神代の穴、翩々として、膝栗毛に乗って来る。
右初めて十返舍一九生に逢い勢州より遣り戯れに賦して以て送る　瀬芳園艸

東海道中膝栗毛五編 上

十返舎一九著

宮重大根[一]のふとしくたてし宮柱は、ふろふきの熱田[二]の神の慈眼[三]す、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく、桑名につきたる悦びのあまり、めいぶつの燒蛤[五]に酒くみかはして、かの弥次郎兵衛喜多八なるもの、やかて爰を立出たどり行ほどに、此頃旅人のうたふをきけば　はやりうた「しぐれはまぐりみやげにさんせ、宮の[六]

一　愛知県西春日井(にしかすがい)郡春日(はるひ)村宮重で産出する尾張大根。その太いところから「ふとしく」の序詞とした。

二　太敷く。柱などをいかめしくたてる。

三　「風呂吹」は大根を熱湯でゆでて、味噌をつけた料理。宮重大根はやわらかで、風呂吹にするとおいしいので、その縁で「ふろふき」を出し、それは熱いのをふきふきたべる料理なので、「熱田」といいかけた。

四　「みそなはす」は、見るの敬語。慈眼をもっておまもり下さる。

五　蛤を貝にはいったまま、松葉で焼いたもの。

六　「時雨蛤」は「時雨煮」ともいう。蛤や牡蠣の剝身を生姜・山椒などの香味をそえて佃煮にしたもの。桑名の名産。

お亀(七)が情所ヤレ・コリヤ、よヲし〳〵よし　馬士「コレ旦那衆、戻り馬のらんせんか　弥二「よヲし(八)よし　馬士「やすいに。たんだ百五十でやらまいか　弥二「よヲしよし　北八「せ(九)うろく四文でのるべいか　馬士「そんならよヲせよせ(一〇)　馬「ヒイン〳〵　長もちにんそく「ふねはナア追手(おて)にほかけてはしるナアンヱ。はやくサア。あつ田に泊(とま)りたやナアンアヱ。八兵衛どふした。馬でものんだか。なんだかはねら(一一)ア。どつこい〳〵　北八「なんと弥次さん。なにもなぐさみだに、こうしよふじやアないか。おめへの荷物(にもつ)とわしがのを、いつしよにして、ひとりがひつかついで、半日がはりに旦那(だんな)と家來(けらい)のしうち(一二)はどふだろう　弥二「コリヤおもしろい。それよかろふ。まづおいらから、旦那をはじめるぞ　北八

七　「お亀」は、飯盛女の総称。「情所」は局所をいう。蛤を女陰にたとえたのである。

八　流行歌の囃子詞をそのままいったのである。

九　六のことを正六という。「正六四文は」六十四文のこと。

一〇　流行歌の囃子詞をもじって「よヲせよせ」といったのである。

一一　元禄頃、塩屋長次郎という手品師があって、馬を呑んで見せたという。

一二　「はねる」というのは、荷の重みの平均に荷われぬをいう。荷物が肩から上ったり下ったりしておちつかないのである。馬でものんだせいか、はねると続く。

一三　やりかた。しかた。

「そりやアいゝが、けふはもふ八ッ(一)だから、七ッ(二)がはりにしやせう。勿論(もちろん)だんなと供(とも)のあしらひは、たがひにばんくるはせなしに、やらかしやせう(三)ぜ　弥二「しれた事よ　トいひつゝあたりに、竹一本を(四)さいかくし、弥次郎がにもつと、北八がつゝみを、りやうほうにくゝりつけて　北八「先ヅ(五)としやくにおめへ旦那よ。おいらは上下(六)といふもので出かけよふ。ナントよつぽど、気がきいてゐるだろふ　トあとから荷をひつかたげて　北八「モシ旦那へ弥次「なんだ　北八「いゝ天気でござります　弥二「ヲ、サ風が凪(なぎ)であつたかだ　北八「さやうでござります　ト(七)かりにしう〳〵のごとく、打かたりつゝゆくほどに、はやくも(八)大ふく村、(九)安中村を打過て、(一〇)町や川にさしかゝれば、弥次郎兵衛取あへず

旅人を茶屋の暖簾(のれん)に招(まね)かせてのぼりくだりをまち屋川かな

斯打興(かくうちけう)じてなを村(一一)おぶけ村(一二)にたどりつく。此あたりも蛤(はまぐり)の名物、旅人を見かけて、火鉢(ひばち)の灰(はい)を仰立(あをりたて)〳〵　女「おはいりなさりまアせ。諸白(もろはく)もおめしもござりまアす。おしたくなさりまアせ〳〵　かごかき「駕いかまいかいな。これから二里半の長丁場(ながてうば)じや。安(やす)うしてめさぬかい　弥二「イヤ

一　午後二時。
二　午後四時。
三　取扱い。取合せ。
四　才覚する。くめんする。
五　年役に。年齢が上だから、その特権で。
六　輪講に道中上り下りの日傭の人足の意であろうとしている。
七　仮りに主従のようにして。
八　大福村は、現在桑名市大福。
九　安中村は、安永村であろう。今は桑名市安永。
一〇　町屋川。滋賀県との境の竜ガ岳山麓に発し、桑名の南方で伊勢湾にそそぐ。
一一　「上り下りの旅人を待つ」に「町屋川」をかけた。
一二　縄生村。今は三重県三重郡朝日町縄生。
一三　小向(おぶけ)村。今は朝日町小向。昔この辺に万古(ばんこ)焼の窯元があった。
一四　火鉢。ひどこ(火床)は、箱の中に土を塗って作った竈。

かごは入らぬ　かご「あとのおやかた、旦那をのせもふして下んせ。戻りじや。やすめに　北八「だんなは、おひろいがおすきだ　かご「そふいはずと、モシ旦那、やすうしてやらまいかいな　弥二「やすくてはいやだ。高くやるならのりやせう　かご「そしたら、高うして三百いたゞきましよかいな　弥次「いやだ〳〵。もちつと高くやらねへか　かご「ハアまんだやすいなら、三百五十やみげんこで　弥次「壱貫五百ばかりなら、のつてやろふか　かご「エ、めつそふな。わし共も商賣冥利、そないにやつとはいたゞかれませぬ。せめて五百でめして下んせんかい　弥二「それでも安いからいやだ　かご「ナアニやすいこんではあらまい。そしたら、わかれに七百くだんせ　弥二「イヤ〳〵めんどふだ。何かなし壱貫五百よりまからぬ〳〵　かご「はて扨こまつたもんじや。それよりちつともまからまいか　弥二「まからぬ〳〵　かご「エ、なんの事じや。かごかきのほうから、ねぎるといふはめづらしい。まゝよぼうぐみ、壱〆五百でやらまいかい。サア旦那

一五　団扇で煽ぎたてる。
一六　宿場と宿場との距離の長いこと。
一七　安目に。安い気味に。安目にするからの意。
一八　「やみ」は「三十日（みそか）は闇」より出た語で、三・三十・三百などをいう。「げんこ」（拳固）は五指であるから、五・五十などをいう。
一九　商売のおかげで生活しているものであるから、不当なことはできない。
二〇　たくさん。たんと。
二一　別れに。
二二　何やかやということなしに。とやかくいわず。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com